

東岸居士詞章

旅人「かように候者は。東国方の者にて候。我此程は都に上り。彼方此方を一見仕りて候。又今日は清水寺へ参らばやと存じ候。

居士「松をさへ。皆桜木に散りなして。花に声ある風かな。

旅人「いかに申すべき事の候。これは承り及びたる東岸居士にて渡り候ふか。さて今日は如何様なる聴聞の御座候ふぞ。

居士「事あたらしき問事かな。聴聞といつば。万事は皆目前の境界なれば。柳は緑。花は紅。あら面白の春の景色やな。

旅人「あら面白の答へや候。さて此橋は如何なる人の懸け給ひたる橋にて候ふぞ。

居士「是は先師自然居士の。法界無縁の功力を以て。渡し給ひし橋なれば。今又かやうに勧むるなり。

旅人「さてく東岸西岸居士の。郷里は何処如何なる人の。父母をはなれし御出家ぞや。

居士「むつかしの事を問ひ給ふや。本より来たる所もなければ。出家といふべき謂もなし。出家にあらねば髪をも剃らず。衣を墨に染めもせで。唯おのづから道に入つて。

旅人「善を見ても。

居士「進まず。

旅人「智を捨てゝも。

居士「愚ならず。

旅人「折に触れ。

居士「事に渡りて白川に。

旅人「かくれる橋は。

居士「西。

旅人「東の。

地「東岸西岸の柳の。髪は長く乱るゝとも。南枝北枝の梅の花。開くる法の一筋に。渡らん為めの橋なれば。勧めに入りつゝ。彼の岸に至り給へや。

旅人詞「いつもの如く歌うて御聞かせ候

旅人「私は東国のものですが、京都に登ってあちこちを見物して歩いています。そして今日は清水寺に参詣しようと思います。

旅人は門前のものを読んで、何か面白いものはないかと尋ねる。門前のものは東岸居士が面白いからうと言つてこれを呼び出す。

居士「桜の花がどの木にも散りかかつて、緑のまつも花に覆われて桜の木のように見える。松ふく風にも花が飛び交っているので、風が音を立てるのではなく、花が音を立っているようだ。

旅人「あなたが噂に聞く東岸居士ですか。さて、今日はどういう趣旨の説教をするのですか。

居士「珍しくもないことを今更尋ねるのですね。仏の教えというものは別に変わったものではない。すべて眼の前にあることがそのまま悟りの種となるもので、「柳は緑、花は紅」これが自然。ああ、じつに面白い春の景色です。

旅人「これは面白い答えです。さて、この橋はどのような方が架けられたのですか

居士「これは先師である自然居士が仏法に縁のない衆生を救おうという功德から、衆生に寄進を受けて架けられた橋です。自分も同じように衆生に仏縁を結ばせようと思ひ、このように勧進をしています。

旅人「それからあなた方東岸・西岸居士の故郷はどこらでいかなる経緯で両親から離れて出家なさったのですか。

居士「うるさいことを尋ねる方だ。もともと出てきた所がないのだから、出家とも言えない。出家ではないのだから髪も剃らず。墨染めの衣も着ない。ただ何となく仏道に入った。そのため善を見たからとて殊更進んでこれを行うこともせず。智を捨てたところで愚になるということもなく。折に触れ事に触れていつとはなく物事を悟つたのです。あの白川橋の東西の岸の柳のような美しい髪が乱れ、心が乱れても、梅の花が時がくれば自ら開くように自然と悟ることのできる。そのありがたい仏法に心を向けるようにと思つてこの橋を架けるのだから、どうぞあなたも勧進に入つて涅槃の彼岸に着くようになさい

旅人「またいつものように謡つて聞かせてください

へ。

居士詞「げにくも狂言綺語を以て。讚
仏転法輪の誠の道にも入るなれば。人の心
の花の曲。いざや歌はん是ととも。

地「御法の舟の水馴棹。く。皆彼の岸に
至らん。

居士「面白やも胡蝶の夢の内。

地「遊び戯むれ舞ふとかや。

(中之舞)

居士「鈔に又申さく。あらゆる所の仏法の
趣き。

地「箇々円成の道すぐに。今に絶えせぬ跡
とかや。

居士サシ「但し正像すでに暮れて。末法に
生を受けたり。

地「かるが故に春過ぎ秋来れども。進み難
きは出離の道。

居士「花を惜しみ月を見ても。起り易きは
妄念なり。

地「罪障の山にはいつとなく。煩惱の雲あ
つうして。仏日の光り晴れ難く。

居士「生死の海にはとこしなへに。

地「無明の波荒くして。真如の月宿らず。

「生を受くるに任せて。苦にくるしみを受
け重ね。死に帰るに随つて。闇きより闇き
に趣く。六道の街には。迷はぬ所もなく。

生死の肩には。宿らぬ住家もなし。生死の
転変をば夢とやいはん。又現とやせん。是
等有りといはんとすれば。雲と上り煙と消

えて後。其跡を留むべくもなし。無しといは
んとすれば。又恩愛の中。心とまつて腸
を断ち。魂を動かさずといふ事なし。彼の

芝蘭の契りの袂には。骸をば愁嘆の焰に焦
がせども。紅蓮大紅蓮の氷をば。終に解か
す事なし。鴛鴦の衾の下に眼をば。慈悲の
涙に湿せども。焦熱大焦熱の焰をば。終に
しめす事なし。かゝる拙き身を持ちて。

居士「殺生偷盜邪淫は。

地「身に於て作る罪なり。妄語綺語悪口兩
舌は。口にて作る罪なり。貪欲嗔恚愚痴は

い。

居士「いかにも「狂言奇語の誤りを転じて讚仏乗の
因、転法輪の縁となさん」と言つて遊芸からでも仏
の道に在ることが出来るのだから、人の心を喜ばせ
るような花の曲を歌いましょう。

地「仏の教えに棹をさして極楽浄土に至りましよう
居士「面白や、これも胡蝶の夢のように遊び戯れ舞
いましよう。

(中之舞)

居士「仏教の注釈書に述べられたようにあらゆる仏
法の教えは

地「衆生一人一人をして円満に仏道を成就せしめる
ためのものであつて、その教えは今に絶えず伝えら
れている。

居士「しかし釈迦入滅後、仏法の盛んな正法・仏法
の二期はすでに過ぎ去つて今は末法の世であり我ら
はそういう世に生を受けている。

地「春過ぎ秋来たり多くの歳月を経ても容易に煩惱
の苦界を離れて涅槃の道に在ることができず、花を
眺めても月を見ても、とにかく妄念が起りやす

い。こうして罪は山の如くに積み重なり煩惱は雲の
如く重なつて太陽の如き仏の教えを悟ることができ
ない。

居士「生死の迷界に漂つて

地「煩惱はまさり真如の光を見ることができないの
だ。およそ生をこの世に受けて人間と生まれたもの
が、ただ苦しみの上に苦しみを重ね、そのまま死ん

でゆくのはただ闇より闇へと移つてゆくようなもの
だ。六道の苦界に迷う外はなく、生死の迷界から一
歩も出ることはできない。ならば、この生死無情の

転変は夢幻のものだろうか。あるいは実在のものとな
らば、人が死に、雲のようになり煙のように消えて
しまつて跡形も残らないのだから実在とはいふこと

ができない。では夢幻のものとすれば、人が死
んだ後、生き残つた人々の間に恩愛の情が残り、断
腸の思いや魂を動かすほどの悲哀を与えるのだから

夢幻と言ひ切ることができない。しかもこの悲哀、
たとえば極めて仲の良い友の死に対して発する愁嘆
の情はいかにも熱い思いであるが、その熱さをもつ

又。心に於て絶えせず。御法の船の水馴棹。皆彼の岸に至らん。

旅人「とてもものに羯鼓を打つて御見せ候へ。

(物着)

居士「面白や松吹く風颯々として。波の声茫茫たり。

旅人「所は名におふ洛陽の。詠めも近き白川に。

居士「波の鼓や風のさくら。

旅人「打ち連れ行くや橋の上。

居士「男女の往来。

旅人「賤上下の。

居士・旅人「袖を連ねて玉衣の。さあ／＼沈み浮波の。さくら八撥打ち連れて。

居士「百千鳥。

(羯鼓)

居士「百千鳥囀る春は物毎に。

地「あらたまれども我ぞふり行く。

居士「行くは白河。

地「行くは白河の。橋を隔て、向ひは。

居士「東岸。

地「此方は。

居士「西岸。

地「さ／＼波は。

居士「さくら。

地「うつ波は。

居士「鼓。

地「いづれも／＼極楽の。歌舞の菩薩の御法とは。聞きは知らずや旅人よ旅人よ。あら面白や。

居士「お、南無三宝。

地「げに太鼓も羯鼓も笛箏。絃管ともに極楽の。御菩薩の遊びと聞く物を。

居士「何と唯。

地「何と唯。雪や氷と隔つらん。万法皆一如なる。実相の門に入らうよ。／＼。

としても死者の苦しむ紅蓮・大紅蓮地獄の水を溶かすとはできない。また仲睦まじい夫婦が死別した時、愛慕のあまり滂沱の涙を流そうとも、その水をもって死者の苦しむ焦熱・大焦熱地獄の焰を消すことはできない。このような情けない身なのに。

居士「殺生・偷盜・邪淫

地「この三つは肉体に関する罪。妄語・綺語・悪口・両舌この四つは口に関する罪。貪欲・瞋恚・愚痴この三つは心に関する罪。このような十悪を絶えず犯しているのである。どうか仏の教えに棹さして、皆揃って極楽の彼岸に行きたいものである。

旅人「この機会に羯鼓を打って見せてください

(物着)

居士「面白ことだ、松に吹く風はさつさと、岸を打つ何はぼうぼうと

旅人「所は名高い都を一望できる白河の辺りで

居士「波は鼓を打つ。風はササラをする如く

旅人「その白川の橋の上を通るのは

居士「男も女も

旅人「身分の高い人も低い人も

居士「連なって行き来する。互いの袖が擦れる音も

川の音もさらさらと聞こえる。合わせて私もササラを擦り、八撥を打ちましょう。

羯鼓)

和歌「「ももちどり さえずるこえは ものごと

に あらたまれども「われぞふりゆく」

ゆくは白河の橋、向かいは東岸。こちら側は西岸さ

ざなみの音はササラの音打つ波の音は鼓の音。いず

れも極楽で聞こえる歌舞の菩薩の音楽に聞こえる。

お聞きなさい旅人よ。ああ面白い。お、南無三宝。

太鼓・羯鼓・笛・箏。弦楽・管楽全て極楽の菩薩の遊びである。何であろうとも雪と氷のように形が

変われども本質は同じもの。万物すべて同一体と悟り。真理の門に入りましょう。

砧 詞章

夕霧登場

夕霧「旅の衣の遙々と。旅の衣の遙々と。

蘆屋の里に急がん

これは九州蘆屋の何某殿に仕へ申す。夕霧と申す女にてさむらふ。さても頼み奉り候何某殿は。御訴訟の事候て。三年に余りご在京にて候。妾も御供申し都に候しが。故郷の事心許無く思し召し候ほどに。御使いに参れとの御事により。只今蘆屋の里へと急ぎ候

「此程の。旅の衣の日も添ひて。く。いく夕暮の宿ならん。夢も数そふ仮枕。明かし暮らして程もなく。蘆屋の里につきにけり。く。」

「急ぎ候ふ程に。蘆屋の里に着きて候。やがて案内を申さうするにて候。いかに誰か御入り候。都より夕霧が参りたる由それそれ御申し候へ。

芦屋某の妻登場

妻「夫れ鴛鴦の衾の下には立ち去る思ひを悲しみ。比目の枕の上には波を隔つる愁ひ有り。ましてや疎き妹脊の中。同じ世をだに忍草。我は忘れぬ音を泣きて。袖にあまれる涙の雨の。晴間まれなる心かな。

夕霧「夕霧が参りたる由御申し候へ。

妻「夕霧と申すか人までもあるまじ此方へ来り候へ。いかに夕霧。めづらしながら恨めしや。人こそ変はり果て給ふとも。風の行方のたよりも。など音づれば無かりけるぞ。

夕霧「さん候とくにも参りたくは候ひしかども。御宮づかひの隙無くて。心より外に三年まで。都にこそは候ひしか。

妻「なに都の住まひを心の外とや。思ひやれげには都の花ざかり。なぐさみ多き折にだに。憂きは心の習ひぞかし。

地「鄙の住居に秋の暮れ。人目も草もかれがれの。契りも絶えはてぬ。何を頼まん身のゆくへ。

夕霧登場

夕霧「この遠い旅路、芦屋の里へ急ぎましよう。私

は九州芦屋の某に仕える夕霧と申します。使えていませ某殿は、ご訴訟の事がございまして、三年にわたって在京していらつしやいます。私もご一緒に都で仕えておりましたが、主人が故郷の事を心配に思ひになつて、私に使いに参るようおっしゃつたので、ただいま芦屋の里へと急いでおります。

夕霧「この程の旅の日数も重なつて、もう何度、旅の夢を枕に結んだことか。そのような一夜を明かしていくうちに、まもなく芦屋の里に着きました。道中を急いだので芦屋の里に着きました。すぐ案内してもらうように申しましょう。どなたかおいでではありませんか。都から夕霧がやってきました旨をお伝えください。

芦屋某の妻登場

妻「夫婦仲のよいおしどりは、共寝の夜具の中でも、別れる時を思い悲しみ、ヒラメは枕を並べていても、波によって隔てられはしないかと不安である。まして、人間の夫婦は疎遠な契りを結んでいるのに、来世は愚か、この世でさえ夫と離れている辛さを忍んでいる。夫を想い泣いて涙に濡れ、袖の乾く間もなく、涙の雨で晴れる間のないわが心よ。

夕霧「夕霧が参つたと、お伝えください。

妻「夕霧と申すか取次ぐまでもあるまい、こちらへお入りなさい。さて夕霧、来てくれたのは嬉しいが、怨めしくもある。たとえ夫の心がお変わりになつてしまつたとしても、どうしてそなたまでが、風の便りにも音信をしてくれなかつたのか。

夕霧「その通りでございます。もっと早く参りたいとは思つておりましたが、ご奉公が忙しく、心ならずも三年も都にありました。

妻「なに、心ならずも都に住んだというのか。私のことも思つておくれ。たしかに都でも、花盛りやいろいろ慰み事が多い時でさえ、人というものは、辛い気持ちになるのが人の心のさだめというものであらう。

地「田舎暮らしには飽き飽きとし、秋も暮れば、訪ねてくる人もなく、草木も枯れていく。その上、夫との契りが絶え果ててしまつては、これからい

「三年の秋の夢ならば。く。憂きは其まゝ覚めもせで。思出は身に残り。昔はかはり跡もなし。実にや偽りの。なき世なりせば如何ばかり。人の言の葉うれしからん。愚の心やな。愚なりける頼みかな。唐土蘇武の故事

妻「あら不思議や。あなたに当つて何やらん物打つ音の聞え候。あれは何にて候ふぞ。

夕霧「あれは里人の砧打つ音にて候。

妻「げにや身の憂きまゝに古事の思ひ出でられて候。唐土の蘇武といひし人。胡国とやらんに捨ておかれしに。故郷にとゞめおきし妻や子の。蘇武が夜寒を思ひやり。高樓に登りて砧を打つ。志の末通りけるか。万里の外なる蘇武が旅寝に。故郷の砧聞えしとかや。妾も思ひや慰むと。とてもさびしきくればとり。綾の衣を砧に打ちて。心を慰まばやと思ひ候。

夕霧「悲しやな砧などと申すものは。賤しき者の業にて候へさりながら。御心なぐさまれん為ならば。砧をこしらへて参らせ候ふべし。

砧の段

妻「いざく砧打たんとて。馴れて衾の床の上。

夕霧「涙かたしき小庭に。

妻「思ひをのぶる便りぞと。

夕霧「夕霧立ちより主従共に。

妻「恨みの砧。

妻・夕霧「打つとかや。

地「衣に落つる松の声。衣に落ちる松の声。夜寒を風や知らずらん。

妻「音づれの。稀なる中の秋風に。

地「憂きを知らする夕べかな。

妻「遠里人もながむらん。

地「誰が世と月はよも訪はじ。

たい何を頼りに生きて行けばよいのか。この秋までの辛かった三年間が夢ならばよいのに。現実には辛さがなくなることはなく、ただ昔の思い出だけが体に残って、楽しかった昔は一変してしまい、跡形もなくなってしまうた。本当に、人の言葉に偽りのない世の中であつたならば、夫の言葉はどれほど嬉しいだろう。嘘とは知らず、夫の言葉を信じていたのは、まったく愚かであつた。

唐土蘇武の故事

妻「あら不思議。あちらの方から物音が聞えるが、あれは何の音でしょう。

夕霧「あれは里人が砧を打つ音でございます。

妻「我が身の辛いにつけて、昔話を思い出しました。唐土の国の蘇武という人が、胡国という所へ追放されたところ、故郷に残した妻や子が、夫はこの夜寒に寝られなくて苦しんでいるだろうと心配して、高樓に上つて砧を打つた。すると、その志が通じたのか、万里を隔てた所にいる蘇武の旅寝に、故郷の砧の音が聞こえたという。私も気持ちが慰められるかもしれないから、この寂しくてどうしようもないこの夕暮に、綾の衣を砧で打つて、心を慰めようと思ひます。

砧の段

妻「さあ砧を打とう。夫婦一緒に慣れ親しんだ床の上、

夕霧「今は一人狭いむしろの上で涙を流し

妻「気持ちを慰める助けになるかと

夕霧「夕霧も寄り添つて

妻「怨みを込めて砧を

夕霧／妻「打ちましよう。

地「衣を打つ音と、松風の声とが重なり合つて聞こえ、夜寒を風が知らせるようだ。

妻「夫からの便りも稀であつて悲しい思いをしている私に、夫が私に飽きてしまったのかとも思わせるような秋風が吹いて来て

地「自身の辛さを思い知らされる夕べだなあ。

妻「遠くにいる夫もこの月を眺めていることだる

(イロエ)

妻「面白の折からや。頃しも秋の夕つ方。

地「牡鹿の声も心凄く。見ぬ山風を送りき

て。梢は何れ一葉ちる。空すさましき月影

の。軒の忍ぶに移るひて。

妻「露の玉垂かゝる身の。

地「思をのぶる夜すがらかな。

夕霧「宮漏高く立って。風北に廻り。

妻「隣砧緩く急にして月西に流る。

地「蘇武が旅寝は北の国。是は東の空なれ

ば。西より来る秋の風を。吹き送れと。間

遠の衣打たうよ。

地「故郷の軒端の松も心せよ。くく己が

枝々に。嵐の音を残すなよ。今の砧の声そ

へて。君がそなたに吹けや風。余りに吹き

て松風よ。わが心。通ひて人に見ゆなら

ば。其夢を破るな。破れて後は此衣。誰か

来ても訪ふべき。来て訪ふならばいつまで

も。衣は裁ちも更へなん。夏衣。うすき契り

は怨めしや。君が命は長き夜の。月にはと

ても寝られぬに。いざく衣打たうよ。彼

七夕の契りには。一夜ばかりの狩衣。天の

河波立ち隔て。逢ふ瀬かひなき浮舟の。梶

の葉もろき露涙。二つの袖やしをるらん。

水掛草ならば。波うち寄せようたかた。

う。

地「けれど、あの月は誰であるかと平等に照らし、月を見ているのがどのような人物なのかなど問うたりはしないのだ。

(イロエ)

妻「趣深いとされる秋の夕暮れ時、

地「牡鹿の声ももの寂しく感じ、目には見えない山

風が吹いてきたことを知らせ、どこの梢からか木の

葉が一枚舞い散って、空に寒々とある月の光が、軒

の忍草に映る。

妻「忍草の露が玉簾をかけたようにきらめく。このような状況の私にとって

地「心を慰める景色である

夕霧「御所の水時計が高い所にかかっている、風は北へと吹いて行く。

妻「隣の家が打つ砧の音はときに緩やかに、ときに忙しく聞こえているうちに、月は西の方へ傾いて行く。

地「蘇武が旅をした胡国は北にあったが、私の夫のいる所は東の方だから、西から吹いて来る秋風が、砧の音を東へ吹き送っておくと、粗末な衣を打とう。

地「故郷の軒端の松も気をつけておくれ、己が枝々に嵐の音を残さず、この砧の音を運んで、あの方のもとへ吹き送っておくれ。けれども松風よ、余り烈しく吹くのではないよ。私の心が通じて夫の夢で出会えたならば、その夢を破ってはいけないよ。破れた衣を誰も着ないように、途中で夢が破れて私の心が通じなかったならば、夫は帰って来てはくれないから。夫が帰って来てくれるならば、衣が何度でも裁ち直せるように、夫婦の関係をもう一度結びたい。夏の衣のように薄い契りはなんともうらめしいが、あなたの長寿を祈りつつ、このような月が出ている晩はとも寝られそうもないので、さあさあ砧を打とうよ。

地「七夕の牽牛と織女の契りは、年に一夜だけのかりそめのもので、いつも天の河の波に隔てられ、せつかくの逢瀬の甲斐もなく、櫂の無い浮舟のようにどのようになるかわからない恋、梶の葉をつたう露のように流れる涙に、二人の袖は萎れることだる

妻「文月七日の暁や。

地「八月九月。げにまさに長き夜。千声万声の。憂きを人に知らせばや。月の色風のけしき。影におく霜までも。心すごき折ふしに。砧の音夜風。かなしみの声虫の音。まじりて落つる露涙。ほろくはらくくくと。いづれ砧の音やらん。

妻の死

夕霧「いかに申し候。殿は此年の暮にも御下りあるまじく候。

妻「恨めしやせめては年の暮をこそ。偽りながら待ちつるに。さては、や誠に愛はり果て給ふぞや。

地「思はじと思ふ心も弱るかな。

「声も枯野の虫の音に。乱る、草の花心。風狂じたる心地して。つひに空しくなりにけり。く。

(中入)

芦屋某の帰還

(間狂言)

芦屋「無慥やな三年過ぎぬる事を恨み。引き別れにし妻琴の。つひの別れとなりけるぞや。

「さきだぬ。悔の八千度百夜草。悔の八千度百夜草の。陰よりも二度。帰りくる道と聞くからに。梓の弓の裏弭に。言葉をかはずあはれさよ。く。

(出端)

妻の亡霊の出現

亡妻「三瀬川。沈み絶えにしようたかたの。

う。天の川に生えるという水かけ草のような二人のために、泡沫の泡よ、波を打ち寄せて、二人を逢わせてやっておくれ。

妻「七夕の別れは七月七日の暁の話であったが地「七夕を過ぎて、八月九月となり、本当に長い夜を孤独に過ごし、その間に何千回も打った砧の、悲しんでいる私の心の音を、夫に知らせたいものだ。月の色も風の気色も、月の光に照らされる霜も、心が寂しく感じられる時々砧を打っていると、夜風の音、悲しみの声、虫の音、それに交じって落ちる露の音や涙の露が、ほろほろはらはらはらと音を立てて、どれが砧の音かわからなくなってしまった。妻の死

夕霧「申し上げます。旦那さまはこの年の暮にもお帰りにならないとの事でございます。

妻「うらめしい。せめてこの年の暮にはお帰りになるかと、心をだましだまし待っていたのに、もう本当に心変りをしてしまわれたのか。

地「心変わりしたとはもう思うまいと、夫を思う力もなくなってしまった。声も枯野の虫の音のように弱々しくなり、荒れ野に乱れ咲く草のように心は乱れ、病の床に伏し沈んでいるうちに、とうとう命を落としてしまった。

(中入)

芦屋某の帰還

(間狂言)

下人がこれまでの経緯を芦屋の某に伝え、某はすぐ帰国する。

芦屋「かわいそうなことをした。離れ離れになってから三年間過ぎたのを怨んで、別れた妻は命を落とし、永遠の別れとなってしまったのか。先立たない後悔を繰り返し。

芦屋／従者「先立たない後悔を繰り返し、草の陰から魂が再び、帰ってくる道であると聞いたので、梓の弓の弦を鳴らして亡き妻の魂を呼び出し、梓弓の芦屋「占に現われる妻と言葉をかわそうとするが、何と悲しいことだ。

(出端)

妻の亡霊の出現

亡妻「三途の川に沈んでしまって、絶えてしまった

あはれはかなき身のゆくへかな。標梅花の光りを並べ。娑婆の春をあらはし。跡のしるべの灯は。真如の秋の月を見する。

「さりながら我は邪姪の業ふかき。思ひの煙の立居だに。安からざりし報いの罪の。乱るゝ心のいと責めて。獄卒阿防羅刹の標の数のひまもなく。打てやくと報いの砧。恨めしかりける。因果の妄執。

地「因果の妄執の思ひの涙。砧にかゝれば。涙はかへつて火焰と為つて。胸の煙の焰にむせば。叫べど声の出でばこそ。砧も音なく松風も聞えず。呵責の声のみ恐るじや。

「羊のあゆみ隙の駒。く。うつりゆくなら六つの道。因果の小車の。火宅の門を出でざれば。めぐりめぐれども。生死の海は離るまじや。あぢきな浮世や。

亡妻「恨みは葛の葉の。

地「恨みは葛の葉の。帰りかねて執心の面影の。恥かしや思夫の。二世と契りてまなほ。末の松山千代までと。かけし頼みはあだ波の。あらよしな空言や。そもかゝる人の心か。烏てふ。大をそ鳥も心して。うつし人とは誰かいふ。草木も時を知り。鳥獣も心あり。げにまこと喩へつる。蘇武は旅雁に文を附け。万里の南国に至りしも。契りの深き志。浅からざりし故ぞかし。君いか

泡沫のように哀れではかないわが身の行方であるよ。墓標にある梅の花に照り映える光は美しさを競い、娑婆世界の春を表している。死後の道標としてある灯火は極楽世界へと導く真如の月のように見える。

しかしながら、私は夫を恋慕する気持ちが強く、愛憎の思いが煙のように漂い、日常のありふれたことにも安らかな心を持たなかった報いで、死後も乱れる心が責められる。地獄の鬼、阿防羅刹が鞭打つ音は絶え間なく、生前夫を思つて砧を打っていた報いで、阿防羅刹に「打てや打てや」と打たれるのだ。なんと怨めしい。前世で夫を慕いながらも怨んだ妄執。

地「前世の妄執を思い出して流れる涙が砧にかかる。その涙は火炎となつて、胸に煙を立ち込めさせる炎に咽ぶが、叫んでも声は出ない。砧の音もなく、松風も聞こえず、ただ獄卒に責められる声だけが聞こえてくる。なんと恐ろしいことか。

ときには屠所に引かれていく羊の歩みのように遅く、ときには物の隙を通り抜ける駒のように速く、人は六道をめぐるといふが、私は「因果の小車」に乗っている。煩惱にまみれた現世を示す「火宅」から出ることは出来ない。めぐりめぐっても、生死の苦しみの連続からは離れられない。なんの甲斐もない定めもない憂き世である。

亡妻「恨みは葛の葉が返るように

地「恨みは葛の葉が返るように度々私の心に湧き起ってくるので、冥途に帰ることも出来ない。執心のために変わり果てたこの姿を夫に見られるのは恥ずかしい。夫とは二世の契りを結んでもまだ足りず、末の松山にかけて千代まで心変わりしないと誓ったのに、その約束も反故にして、とりとめもない嘘をついたことか。それが人の心というものか。カラスという大うそつきの鳥でも、少しは心がある。これでも夫のことを正気の人と申せまじょうか。草木でも、花咲き実を結ぶ時節を知り、鳥や獣でも心のあるものだろう。生前例にした蘇武は雁の足に文をつけてまで、苦心をして便りを出し、万里を隔てた南国へ届いたというのは、夫婦の契りが浅くはなかったからです。それに比べて、あなたはな

なれば旅枕。夜寒の衣うつゝとも。夢とも
せめてなど。思ひ知らずや恨めしや。

成仏

「法華読誦の力にて。く。幽霊まさに成
仏の。道明らかににけり。是も思へば
仮初に。打ちし砧の声の内。開くる法の花
心。菩提の種となりにけり。く。」

遠い旅に出て、秋の夜寒に砧を打っても、せめて夢
の中でもいいから気づいてくださらなかったのか。
ああ、あまり薄情で怨めしい。

成仏

「夫が法華経を読誦した功德によって、亡妻の幽霊
は成仏し、極楽へ行く道が明らかとなった。これも
思えば、なんとなく打った砧の音の中に、仏法の花
が開く心が含まれていて、それが成仏するための種
となったのであった。」

